



INTERNATIONAL STUDENTS EXHIBITION

第39回 留学生展

B棟交流室2 (B-116)

2025/12/15-19 11:00-17:00

HAN SANHA
WU YUEPENG
CHO YUNJOO
KASETAN ŚLI WOCKI
JOSEPH DE LAPAILLONE

OPENING 15日 6PM - 9PM

主催：京都市立芸術大学

Han Sanha

出身地：ソウル、韓国
出身校：韓国芸術総合学校

私は誰なのか——人生で、多くの人が悩むことではないだろうか。単なる自己探究というよりも、自分がどこから来たのか、誰の影響を受けて形成されてきた人間なのか——彼女は考える。

「お前は失郷民3世代だ」

ある日父に言わされた言葉は、彼女の私は誰なのか？という問い合わせて突如与えられた一つの答えだった。

日本の植民地支配から開放された8.15光復以降、朝鮮半島は南と北に分断され、冷戦構造の中で南北が衝突し、多くの民間人が犠牲となった。

「失郷民3世代」とは、朝鮮戦争で故郷を離れて南へ避難した人々と、その子・孫の世代を指す。戦争によって南へ逃れた人々は、戦後も国境が閉ざされたため故郷に戻れなかつた。彼らの子ども・孫の世代は、戦争の直接体験は無いが、北へのルーツを受け継ぎ、「失われた故郷」を記憶として引き継ぐこととなる。

とはいえる、いきなり失郷民3世代と言われても、故郷であるはずの北に対して敵意を持つよう教育された父を持ち、敵ではなく対話相手として理解をすすめるよう教育された彼女は、どのような立場で考えていくべきか解らなかつた。

祖父が生前に他界し、祖母とは疎遠であった彼女にとって、“北”は近づき難い印象であったが、父の一代記から、遠く感じていた北とのつながりを少しずつ理解していくうちに、彼女は自分の家族についてもっと知りたいと感じた。

創作活動を通じて、彼女は自分のルーツに近づいていく気がしていた。曖昧で、はっきりしない自分を定義できなくても、それでも近づいていく。その感覚が彼女を創作へと向かわせている。

非定型紙と日本画の不可逆性は「変えられない出自」を象徴している。
個人史に留まらず、韓国戦争と分断以後の社会的・歴史的視線がアイデンティティにどう介入するかを探り、彼女は一貫して「私を取り巻く関係」を描き続けていく。

Cho Yunjoo

出身地：韓国

在籍校：韓国芸術総合学校/美術学部

ソウルでは日常的な風景を美しく捉えることを大切にしながら、映像作品を制作してきた。ミュージックビデオや広告など、主にデジタル映像を中心に取り組む一方で、今回の留学をきっかけに「手で描く」アナログ表現へと関心を広げている。自分の目線から見える”日常の新鮮さ”を記録し、それを新たなイメージへと再構成することが、現在の彼女の制作の中心にある。

彼女が最も大切にしているのは「生活の風景を、できるだけ美しく捉えること」である。

ソウルの古い集合住宅や長年残ってきた公園など、何気ない風景が映像の中で美しく現れる瞬間に惹かれ、日常の中に潜む美しさをすくい上げてきた。

今回の展示では、現在暮らしている町・岩倉の風景を題材としている。

留学初期に参加した構想設計専攻の基礎授業「自分だけの散歩ルートを作る」では、自らの行動範囲を地図と写真で記録し、その場所の景色を重ね合わせる作品を構想した。その発表が評価され、実際にクラスの散歩ルートとして採用された経験が、今回の制作へと繋がっている。彼女に、自転車で風景を楽しむ余裕が生まれてきたという。そのような「記憶に滲み込みつつある日常の景色」を、紙の上で再構成しようとしている。

記憶の中の風景は、細部が曖昧に溶けていき、大きなイメージだけが残る。彼女はそんな”記憶のぼんやりとした質感”を可視化することを目指している。

展示作品では、岩倉の風景を写真として撮影し、その断片を色鉛筆とパステルでトレーシングペーパーに描いている。複数の半透明の紙を重ねることで、霞がかかったような質感と、記憶の曖昧さを象徴する重層的なイメージを作り出している。

技法としては

- ・写真を起点とした風景の再構成
- ・トレーシングペーパーの重ね合わせによるレイヤー構造
- ・色鉛筆・パステルによる柔らかな質感の描写

が用いられている。

これらは、これまでデジタル映像を中心に制作してきた彼女にとって新しい試みであり、手作業でのみ生まれる偶然性や、紙という”実物が手に残る”感覚を重視したアナログ的なプロセスが特徴的である。

日本の風景が持つ新鮮さと、自身の記憶の中で揺らぐイメージ。その双方を重ね合わせることで、彼女は日常風景の新たな美しさを可視化しようとしている。

Joseph de Lapaillyone

出身地: フランス

在籍校: 国立高等装飾美術学校

本作家の作品は、〈漫画のコードの探求と再構築〉と〈ドローイングにおけるコードの転用と拡張〉という、二つの補完的な軸によって展開されている。

前者では、スタイル化された人物描写やスピード感あふれる線、フォーマット内の時間的分割といった漫画特有の「コード」を用い、物語の構造を読み解き、再構築している。

後者では、これらのコードをドローイングへと転用し、より学術的なアプローチや、美術史への直接的な参照と交差させながら、表現の可能性を広げている。

作家はまた、こうした大衆的で日常に浸透した視覚様式が今後どのように存在し続けるのかを問いかけながら、美的・時間的・造形的な複数の層で対比を生み出すことを試みている。

近年は、ステッカーやステンシル、定規、粘着テープなどの収集したグラフィック要素を積極的に取り入れ、ドローイングを「参照のコラージュ」から「形のコラージュ」へと発展させている。

さらに、制作では事前の厳密な計画は立てず、制作過程で生まれる問いや、道具に応じて変化する身体の動きによる「ジェスチャーの瞬間性」を重視しており、これらが線のリズムや作品全体の多層的な表情として現れている。

今回の展示では、こうした探求のプロセスをより直接的に示すため、多数のドローイング作品を中心に構成している。

Kajetan Śliwocki

出身:ポーランド

在籍校:マグダレナ・アバカノヴィチ芸術大学

大学では、ビデオパフォーマンスやインスタレーション、絵画など多岐にわたる作品表現を行ってきた。京都市立芸術大学では、版画専攻で木版画と銅版画を学んでいる。自分の生まれた国から地理的にも文化的にも距離がある場所に行きたいという気持ちから、日本に留学を決めた。

絵を描いているとき、後ろに下がって全体を確認するように、離れた場所から自分自身を俯瞰するということを創作活動の1つとしている。彼はこれを「離れて見る」と呼ぶ。

抽象的なドローイングから作られたエッチングと木版画の2作品は、それぞれ家族が暮らした家と、京都で出会った喫茶店が描かれている。目を閉じることで思い起こされる記憶を書き留める。物理的には離れていても、目を閉じることでそこへ行くことができるのだ。

バードハウスを描いたエッチング作品は、よく見ると表面にヒビが入っている。木材を保存する技術でありながら、木材を燃やすという焼杉に興味を持ち、焼杉の質感を再現しようとした。

人の顔がスタンプされた木版画作品は、同じ仏像の絵をいくつも刷った摺佛(すりぼとけ)にインスピライされた作品だ。この顔は作者自身の顔で、彼が持つある幻想をもとに制作された。「私の心には幻想がある。まるで毎日違う人物のように自分には無数の姿があるという幻想。しかしそれは結局幻想に過ぎず、本質的に私はただ一人の人間なのだ」と作者は語る。

ガラスブロックの表裏には、作者と恋人の顔写真が見つめ合うようにスクリーン印刷で転写されている。彼らの物理的な距離と時差を、歪んだガラスブロックを通して表現した。

彼は、青年時代に読んだOlga Tokarczuk (オルガ・トカルチュク)の小説『Podróż ludzi Księgi』が自分の根幹に影響を与えたと語ってくれた。これは旅についての小説であり、彼にとっても「旅」が大切なものになっているのだという。

吳 岳芃/Wu Yuepeng

出身地:中国山東省煙台市

在籍校:中央美術学院芸術学専攻(中国)

一作品のコンセプト

彼女は通っている学校で見た蕉葉文が描かれた青銅器の写真を見た事がきっかけで青銅器や陶磁器などの器物の表面にある蕉葉文やこの形に似ている文様について研究するようになった。

先秦時代の青銅器の蕉葉文は抽象的に見えるが、宋元時代から蕉葉文が再び流行っており、本当の蕉葉文に見えるようになっている。それは植物の文様なのだろうか、あるいは幾何的な文様なのだろうか。また、秦漢時代から魏晋隋唐にかけて、蓮の文様が流行っているが、輪郭線を見ると蕉葉文と同じような三角形が見える。

こういった発見や疑問を基に彼女は研究を現在行なっている。

また彼女は自身の住む中国の陶磁器以外に、世界の陶磁器の文様についても研究を進めている。

蕉葉文に類似している文様は中国のものだけではなく、世界の器物にでもあるのだ。

例えば、古代ギリシアの陶器に現実の植物に似ている文様もある。蕉葉文に似ているつなぎ文様もある。これらの文様は当時から分類されていたのだろうか。発見した未来の人々が研究として分類されただけであって、実は全て同じ植物をモデルにしているかもしれない。そのような可能性を感じながら彼女は研究を進めている。

今回彼女は、美術館や博物館に展示する方法を利用して、自然の中にある小さい博物館のような物を作り、展示を作成した。

器物の表面にある文様は、器物を通してその表面にある文様を見る事ができる。

今回はそれを逆にして、葉っぱの中から青銅器や陶磁器、金銀器などの器物を覗きみることができるようになっている。

つまり文様の基となった植物の自然の文様から装飾として施された文様を見る、という自然側から研究を鑑賞するようになっているのだ。